
『途方に暮れた僕はそっとため息をついてみる』

箕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『途方に暮れた僕はそつとため息をついてみる』

【Nコード】

N3474Y

【作者名】

篁

【あらすじ】

改めて連載を再開させていただきます。

本家『篁のブログ』より遅れての掲載になりますがご了承ください。読んでいただける方が少しでもいらっしやれば、嬉しいです。よろしく願います。

プロローグ

プロローグ

「小鳥遊翔平くん、だね？」

確かに僕の名前は、小鳥遊翔平だ。

高校一年生から、サッカー部では不動のセンターバック。ディフェンスの中心として活躍している。

といえば、聞こえはいいけど、それは僕がたまたま背がひよろ高く、小学生の時には空手を習っていたため、蹴る力は他の部員より強かったからにすぎない。それならフォワードでも、と思われるかもしれないが、蹴る力は強くて、僕が蹴るボールはどこに飛んでいくかは神のみぞ知る、なのである。ゴールキーパー前に配置しておけば、取りあえずのピンチは防ぐことができるだろうという監督の直感ではなく、弱小サッカー部のため、圧倒的に部員が少ないという事実が、僕をレギュラーたらしめているというのが、多分正解だ。

実際、一年生の時は、早速四月半ばの県大会に出場し、僕がクリアしたボールが見事にゴールに突き刺さる。しかし、監督は僕を起用した自身の慧眼に自画自賛、というわけにはいかなかった。つまり、僕が蹴ったボールは味方のゴールを激しく揺さぶったのだった。例年通りの初戦敗退がここで決まった。

二年生になった頃には、さすがに自陣の反対方向にボールをクリアできるようになったが、それでもコントロールが一向に身に付かない僕は、センターバックのポジションに固定されたまま。

土曜の空しい部活での練習を終え、帰宅する途中だった。

よく見かける灰色のプリウスが自転車に乗っている僕の前方を塞ぐ。

車から降りてきたのは五十前後と思われるスーツ姿の男性で、僕の進路妨害に悪びれた様子もなく、普通のサラリーマンよりは少し目力のある視線を遠慮無く僕に浴びせながら、僕の名前を確認してきた。

「そっやけど、なに？」

僕のあからさまな腹立ちと懸念を帯びた視線を泰然と跳ね返し、

その男性は言った。

「やはり、似ているな」

「は？」

「君の父親、祐司ゆしに、だよ」

「親父を知っているの？」

「腐れ縁だ」

「はあ」

「私は垣内。君のお母さんから頼まれて、といえば私が何を言いたいの分かるかな？」

「お袋？」

思い出した。

先日僕は、『バイクの免許が欲しい』とお袋に言った。勿論校則に違反するが、お袋の倫理観はありがたいことに世間と多少はズレている。

「お父さんの知り合いにアルバイトを頼んであげる。自分で稼いだお金で免許を取ってバイクを買うのなら、反対はしないわ」

親父は忙しい商社マンだ。数ヶ月海外で勤務を終え、だらりと家で二、三日過ごした後、また数ヶ月海外へという生活を送っていた。

そして、数ヶ月が数年になり、僕は丸三年親父に会っていない。小さい頃は道具を持たずに山にキャンプに行き、そこでどう一夜を過ごすか、等という子供への慈愛がまったく感じられない遊びに良く連れて行ってもらったものだ。しかし、今の生活では親父の存在は限りなく小さい。

というわけで、お袋のOKが出れば、僕は自由に行動できる。

「バイトのこと？」

「そういうこと」

サッカーは好きだ。でも、単独行動が好きで人見知りの激しい僕に団体競技は難しい。ただボールを大きく外へ蹴り出すだけが役目の僕に話しかけてくるチームメイトだってほとんどいない。それに観戦するのと実際にプレーするのでは大違い。

頭の中でその食い違いを認識し、この違いの差が埋まることはない、と自信を持って確信した僕は、サッカー部を退部することにした。

そして、それが僕が高校生探偵を始めるきっかけになったのだった。

昨日は、秒殺じゆウキョウだった。探偵業の世界では、ターゲットがマンションや会社など、建物を出た瞬間を見逃してしまうことを秒殺と揶揄される。

人がマンションから出て歩き去る、もしくは会社から出て雑踏に紛れるまでにかかる時間は約二、三秒。一日は、八万六千四百秒だから、丸一日中張り込んでも、八万六千四百秒のうちわずか数秒間目を離しているだけで、ターゲットはあっさり行方をくらませる。

テレビや小説などと違って実際の張り込みは地味で、苦労も多い。尿意を催すことだってあるし、ふと視線を外し、周りを眺めることだってある。それに、近所の住人等から不審人物と思われるもいけない。昨今、不審と思われるたらず警察に通報され、職務質問などを受けてしまうことも多い。張り込みは違和感なく風景に溶け込むことが第一で、それが案外難しい。

僕の場合、一日中張り込む必要ではなく、退社後のターゲットの素行調査を行うだけだったので、勤務時間終了前の一時間程度前から、目立たぬように会社の出入り口を見張っていれば良いだけだった。

それなのに、ターゲットが退社する一瞬を見逃し、それから約四時間後、会社が消灯されるまでずっと監視を続けるハメになったのは、八月中旬の十分蒸し暑い気候のせいだったのか、通りを我が物顔で闊歩する女子高生の代わり映えのしない太い足に視線が泳いでいたせいか。大学受験を控えた貴重な高三の夏休みを僕は有意義に過ごしているのだ、と自分を慰める。

夏休み中くらい私服を着ればよいのにセーラー服を着ているのは、援交の客寄せのためなのか、学校の補修でもあるのだろうか、

いずれにせよ、事務所に戻った僕は、残業していた垣内所長に大目玉をくらうことになった。

僕のアルバイト先であるシーク・エージェンシーは、神戸の本社のほか、大阪と京都に支社があり、それぞれ十五人程度の探偵を抱えている。所長の口癖は、『今時ハードボイルドを気取って一人で探偵事務所を構えている奴にどれだけの仕事ができるんや』である。

実際、探偵業にとって必要不可欠なものは、『人脈』、言い換えるなら幅広い情報源、そして調査に割くことの出来る人員の量に尽きる、と言ってしまったても過言ではない。勿論、個々の探偵の技量が優れていれば、それだけ調査の成功率も高くなる。それぞれ尾行が得意だの、聞き込みが得意だの、分野は違えど、優秀な人員を揃えていけば、やがて調査の成功が評判になり、初めてその探偵社は利益を出し始めるのだ。

うちの事務所には違法だが、企業のコンピュータへのハッキングが得意な先輩も居て、調査に役立つ情報を素早く入手することも可能だ。そんな具合に現実を見つめると、映画のように夜な夜な酒場でバーボンをあおり、トレンチの襟を立てて歩くような探偵は食事にもありつけないことが分かるだろう。

面白いことに、シーク・エージェンシーでは、本業の探偵社の他に、ホストクラブや高級クラブを経営しており、そっちの方が多くの利益を生む月も多い。

これらは、各方面の情報を収集する場であり、人脈を築いて新たな顧客を確保する手段であると同時に、新人探偵の修行の場でもある。

高級クラブ『銀縁』^{ぎんえん}には、会社でもそれなりの地位のある客が多く、クラブのママがそれとなく、優秀な探偵社があるのよ、なん

て言うつと企業採用選考中の人事部門の部長なんかは、選考対象者の素行調査、履歴書の真偽や、中途採用者の場合の前の会社の退職の理由などの調査の依頼を確保することができたりもする。

新人探偵は、採用後半年はこれらの店で働かされる。勿論、アルバイトの僕だって例外ではない。

ほとんどの従業員はホストクラブや高級クラブに正式に努めている人達で、所長は『銀縁』を開業するにあたり、わざわざ辣腕のママをスカウトしてきたと聞いている。

新人探偵の『修行』期間の半年間は無給で、客からのプレゼントなど自分の才覚で得たものだけが、給料の代わりとなる。当然、この時点で辞めていく者も多い。

僕はホストとしての半年の修行を、清く正しい高校生という気概を持つて慎ましいホスト初心者を演じ続けた。実際にはただ人見知りの不器用なだけだったのだが、不思議と『かわいい』などと主に水商売系のお姉様方に人気もあって、随分稼がせていただいた。高校生活と夜のホストで寝不足が続いたが、多少は人見知りも改善され、笑みを浮かべながら話を聞き流す術も身につけると同時に酒も煙草も覚えてしまった。聞き込みで役立つ会話術を獲得したのは勿論、バイクの免許も無事取得し、バイクも購入することができた。

今回のターゲットは、かげやまよしかず影山良和。

例に漏れず、浮気調査だ。

「最近帰宅時間が不規則になり、夜中になることも週に一回はあるんです。主人は仕事だって言うけれど、今まではそんなこともなかったので、もしかしたらって思ってた……」

妻である依頼者の探偵社にとってはありきたりのものだった。

「取りあえず一週間、素行調査をしてみましよう」

依頼を請け負った所長は、依頼者にそう答え、多分簡単な調査だ

からという理由で僕にその仕事を回してきたのだった。

通常、尾行を伴う素行調査は、二、三人のチームで行うことが多い。それも当然のことで、ターゲットが途中でタクシーに乗り込む場合もあるし、疚しい心の持ち主はとかく変な行動を取ったりもする。撒かれてしまわないように備え、車で待機する者、徒歩で尾行する者など役割を分担するのだ。ホストクラブでの修行を終えた僕は、そんなチームプレーで、実際の探偵業を学んでいる途上と言えた。

そんな中、初めての単独調査である。

所長にしてみれば僕にどれほどのことができるのか、試してみようってことなのかもしれない。当然、正式な依頼に基づく調査なので、もしかしたら、尾行の得意な大石さんあたりが、どこかで僕のバックアップをしているのかもしれないが。

初日はあっさり秒殺された僕だったが、二日連続で秒殺される訳にもいかない。影山氏の勤務する会社は、三宮のオフィス街にあった。

三宮は、西側に連続している元町や神戸駅周辺とともに、神戸都市圏の中心業務地区を構成する県内随一の繁華街である。多くの鉄道路線が集中する三宮駅を中心に商業施設が集まり、神戸市役所に近いビジネス街でもある。

幸い、影山氏の会社は、センター街と呼ばれる繁華街に近く、夕方にもなれば、涼を求めるサラリーマンや学生でごったがえすため、人待ち風に佇んでいても不審がられることもない。

影山氏がタクシーを拾っても対応できるよう、愛車である中型バイクを乱雑に自転車が並べてある辺りに停めて、僕は作戦を練る。仮に、影山氏が駅北の繁華街のキャバクラとかに行っても怪しまれず尾行するために、わざとラフな格好をしている僕は、尾行をカモフラージュすることを思いついた。

サッカーをするには少しは僕の役に立った身長も、探偵にはあまり向いていないのが事実だ。探偵としては不幸にも背がひよる高

い僕は、ホストクラブではその身長の高さが好結果を生み出しもしたが、本業の尾行を単独でするなら怪しまれやすいという欠点になる。人混みから頭一つ抜け出す僕は目立って仕方がないからだ。

しかし僕は現役高校生。まさか高校生くらいの年齢の奴が跡を付けてもそれを尾行と感づかれることはまず無いであろうが、念のためにキャッチを装うことを思いついた。女子中学生や高校生とくだうだ喋りながら後ろを付いてくる人間を自分の尾行者だと感づく人間もそういないだろうという計算だ。真面目そうな子は避けた方が無難だ。どちらかと言えば今風の没個性的に日焼けさせ、必要以上目の回りに化粧を塗りたくり、ゲーセン周りでたむろしている女子高生なら面白がって、話に乗ってくれるかもしれない。

カラオケ屋の前で、しゃがみ込んでいる三人組の前に立ち止まった僕は、彼女らの正面に同様にしゃがみ込む。彼女たちは、僕が行っている高校の制服を着ていたが、恐らくはまだ一年生か二年生。見覚えがないという理由でそう決めつける。

「なあ、ちょっと面白いことしようと思ってるんやけど、手伝ってくれない？」

「なんよ？」

「うざいんやけど」

「これってナンパ？」

三者三様の返答が返ってきた。ホストクラブでお姉様方を誑し込んだ僕の笑顔でも、彼女たちには通用しないらしい。

「ただでとは言わへんよ」

僕は三枚の五千円札を彼女らの前に差し出した。『出費を惜しんでは結果は出ない』いつもも言っている所長の言葉を信じてみることにする。

「こんな端金で、まさか売春でもやれってんじゃないよね？」

リーダー格らしき、ひときわ目の周りを黒くしたパンダのような子が言う。

「まさか」

「じゃあ、なんよ？」

パンダは何にでも八つ当たりしたい気分のようにだった。何にでも八つ当たりしたいのはこっちの方だと言いたいのをぐっと飲み込み、人選を誤ったかなと思いつつ、僕は言葉を続ける。

「俺さ、こつ見えても探偵やねん」

パンダを筆頭とする三人組の目に興味の色が浮かぶ。

「マジで？」

「おもしろそうやん」

「で、何すんの？」

最後に言葉を発したパンダは僕の手から全ての五千円札を受け取り、残りの二人に一枚ずつ配る。

「浮気調査してんねん」

「おお、マジ探偵やん」

パンダも乗り気になってきたようだ。

「おっさんを尾行するんやけど、一人じゃ目立つやろ。だからちよつとツルんで歩いてくれるだけでいい」

「そんだけ？」

「ただ、いつ会社から出てくるか、分からへんし、その間は暇やで」探偵つてちよつとわくわくせえへん？」

パンダが子分に同意を求める。全員一致で僕の偽装に付き合ってくれることになった。

会社の出入り口が見えるところまで移動した僕たちは、そこで待つことにする。ファーストフード店で、ハンバーガーとジュースを奢ってやり、しゃがみ込んで雑談しながらの張り込みとなった。

「わたしさ、探偵つてもつと渋いおっさんがやっているとってた」パンダが話しかけてくる。僕だって、あと十数年もすれば少しは渋くなれるかもしれない。だからといって、こんなパンダどもの思い通りになっていくのも少し癪に障る。

「まあ、テレビや小説では、そんなんが活躍してるよなあ。うちの事務所にも渋いおっさん探偵はおるよ」

会社の出入り口から目を離さず、僕は所長や大石さんを思い浮かべながら答える。そろそろ、影山氏の退社時刻のはずだった。三人組には影山氏の写真を見せている。とても信頼はできないが、僕が再度秒殺される可能性はわずかでも減っている方がいい。

「なんか殺人事件とかに巻き込まれたりっていうの、ほんまにあるん？」

「それこそテレビの見過ぎやわ。探偵つてのは地味で忍耐がものを言う商売やで」

パンダの子分一号はそれでも、探偵に夢でも見てるのか、「でも、なんか格好ええなあ」と呟いている。取りあえず、普通のサラリーマンよりは女子高生にとって魅力のある仕事なのかもしれないが、確実に言えることは、サラリーマンより安月給だということ、だからといって、普通に付き合っつて金を巻き上げるならサラリーマンの方がええよ、とまで忠告してやる義理はない。

「あんととやっつたら、付き合っつてもええよ」

急にパンダが上目遣いで僕の顔を見ながら言い出す。

「ありがたいなあ」

迷惑さを微塵も見せず、僕は表情を緩めてみせる。それくらいの度量がなければ、探偵なんか務まらない。

「あ、あの人ちやう？」

僕が影山氏を確認したのと同時にパンダ子分二号が声を上げる。

「よし、跡をつけよか」

通常、尾行は風景に溶け込んでしまふのが最も良い。三宮の雑踏の中では、サラリーマン姿で尾行するのが当然という考え方もあるだろう。しかし、影山氏が普段通りJRで帰宅するならそれでも良いが、もし浮気相手が実際に居て、ホテルまでタクシー移動をするのなら、スーツ姿や学生服でバイクに乗る僕は返って目立ってしまうことになる。色々考えた結果の今日の出で立ちだった。

緊張のせいか、少し寡黙になるパンダ三人組に「陽気に笑って」などと声をかけながら、影山氏の後を追う。少々近づいてもこの三

人と一緒なら大丈夫だと判断した僕は、影山氏との距離を縮める。

「こんなに近づいて大丈夫なん？」

パンダが僕に問いかける。

「俺らを見て、誰かを尾行していると勘づく奴がおっいたら、そいつは凄腕の探偵か刑事になれるぞ」

三人組は顔を見合わせ、得意気に鼻を膨らませ、にやにや笑った。影山氏の背中に視線を固定させ、三宮駅方面に向かって歩く。子分一号と二号は時折笑いあいながら、僕とパンダを挟んで歩いている。意外にも彼女たちは、うまく演技をしている。度胸があるのか、感性が鈍っているのか、いずれにしても僕にはありがたい誤算だった。

影山氏が駅に入ってしまったえば、彼女たちは用無しで、僕はそこで彼女たちと別れ、影山氏と同じ電車に乗り込む予定だった。

しかし、影山氏は駅の高架を通り過ぎ、飲食店の建ち並ぶ繁華街方向へ向かっていく。人混みの中で、影山氏を追うのは容易で、影山氏もまさか自分が尾行されているなどは予想もしていなかったのだらう。一度も後ろを振り返ることもなく、一軒の喫茶店に入ってしまった。

続いて僕たちも喫茶店に入る。

影山氏は、奥の二人用のテーブル席に一人で座っている。僕たちは、影山氏と、もしかしたら来るかもしれない相手を横から同時に見ることが出来るテーブル席に座った。彼女たちもそれぞれ席に座る。パンダに椅子の位置を移動させた僕は、影山氏の視界からは僕を消し、なおかつ僕はじっと影山氏を観察できる状態にした。

僕は珈琲を注文し、彼女たちはそれぞれ好きなパフェやケーキやらを注文した。僕はリュックの中からボールペンタイプの高画質のデジタルビデオカメラを取りだし、影山氏にピントを合わせ、紙ナプキンスタンドに差し込み、固定させる。

「えっ、それボールペンちゃうの？」

子分二号が、興味津々という感じで言う。

「ビデオカメラや」

「すっごあい」

「探偵はこういう小物も自分で作らなあかんのや」

パソコンマニアで小物好きの凄腕ハッカー山崎先輩が組み立て、貰っただけという事実をここで伏せておいても罰は当たらないだろう。

「へえ」

三人組はボールペン型ビデオの小さなレンズ部分をのぞき込む。屈託なく興味のあるものに目を輝かせる彼女たちは、案外普通で素直なのかもしれない、なんてふと思ったりもする。

影山氏がしきりに時計を気にし始めた。待ち合わせ時間が迫ってきたということか。女性が来たからといってすぐにその女性が浮気相手だと早合点してはいけない。単なる仕事の打ち合わせかもしれないし、影山氏は実は男が好きだっていう可能性だって否定できない。

やがて、OL風の女性が現れ、影山氏の向かいの席に座る。それに気づいたパンダ三人組は声を潜めて話し始める。

「うわあ、マジやっぱ。ほんまに浮気相手が現れたで」

「超興奮やな」

僕は彼女らに、「もっと普通に声を出して笑って」とかいいながら、影山氏と向かい合わせに座る女性をフレームに納め、写真を数枚撮り、その後はビデオを撮り続けた。

年の頃は二十三、四ぐらいか。女性を見る目がない僕の予想は外れることは多いが、影山氏は三十六歳だから、浮気相手には丁度なのかもしれない。

あとは、二人がこれからどうするのかが問題だ。

今日は木曜だから、明日の夜にでも逢い引きする約束をしているのか、いずれにしても影山氏が自宅に帰るまで尾行を続けなければならない。

「君ら、ありがとつな。今日はこれでお終いや」

「えっ、これからやん。まだ続けようよ」
子分一号が膨れ面をする。

「もちろん、尾行は続けるよ。でも、この格好や面子メンツでの尾行はここまで。俺は一旦店を出て、サラリーマン風に着替えてくるよ。で、彼らが店を出るときから尾行を開始する。君らは、彼らが出ても気づかないフリをして、このままお茶を続けといて」

「なんか中途半端で嫌やなあ」

「うん、嫌やわ」

「ほんま、ほんま」

彼女らは人を尾行するということに、楽しみを覚えたようだった。本業にするには忍耐力と機転力を求められるが、興味本位であるのなら確かに面白いだろう。

最近では探偵の暴露本とかもよく出版されて、世に蔓延るストーカーもそれらを参考にしていると聞く。全く世も末だ。

「もし、何かあったらここに連絡ちょうだい。もしかしたら力になれるかもしれないから」と僕はパンダに名刺を渡した。

するとパンダは自分の携帯番号を教えてくれた。

「また、こんな機会あったら誘ってね」

そう微笑むパンダはごくごく普通の可愛らしい女子高生に見えた。『情報源は百持て』という鉄則に従うのなら、例えば自分の下級生であつても女子高生というなかなか得られない情報源を僕は確保したことになる。いつか調査に役立てばいいな、と僕はありがたく、携帯の番号を自分の携帯に記憶させた。

「早速やけど、もし僕が店の外に出て、五分以内に席を立ちそうになつたら、携帯に連絡してくれな」と僕は言いながら立ち上がる。

神妙な顔をして頷く彼女らに軽く微笑みをサービスし、五千円札をもう一枚、テーブルの上に置いた僕は、彼女らに「ありがとうな」と声をかけ、外に出た。

幸い公衆トイレは近くにあり、大使用の個室に入った僕は、リュックからうす黄色のポロシャツと薄茶のスラックス、ランニング

シューズを取り出し、着替えた。探偵たるもの変装道具は常に持ち歩かなければならない。かといって、登山用リュックなどは問題外だが。ここまで苦勞しながら、この時間だったら学生服のままの方が返って良かったんじゃないかな、などという至極もつともな意見を黙って僕は飲み下す。

後は整髪料で髪型を生真面目な大学生風にセットし、伊達眼鏡をかける。この間、わずか一分ほど。この間に影山氏たちが店を出てしまっていたらアウトだが、パンダたちからの連絡がないところをみると大丈夫のようだった。

軽く店先の歩道を歩いて、店内を確認する。パンダたちも影山氏もまだ店内にいることを確認した僕は、喫茶店をやりすごし、店の出入り口を観察できる位置に移動し、煙草に火を付けた。

僕の予想では、ホテルに行くなら明日の金曜。今日は明日の妄想で話が弾んでいるだけだろう。女性の方に尾行を切り替え、影山氏の相手を特定することも考えたが、今回の女性が影山氏の浮気相手でなかった場合、ただの無駄骨になる。浮気が続くなら、今後いくらかでも調査する機会はあるし、相手の特定までは今回の依頼に入ってなかったなと思いだし、ゆっくりと煙草の煙を宙に吐き出してみよう。

視界の端には喫茶店の出入り口が常に入る様に意識して、高架下の携帯ショップやら本屋を漫然と眺める。陽射しはじりじりと暑く、遠くの路面には陽炎が立っているように見える。

「昔は夏が好きだったのに」
独り言が口をついて出てくる。夏に憂鬱さを感じ始めたのはいつ頃だっただろう。親父が滅多に家に帰らなくなってしまっまでは、好物の西瓜にかぶりついていた明るい陽射しの夏休みが僕を取り囲んでいたような気がする。

物思いに耽りながら二本目の煙草に火を付けたとき、視界の端に動きが見えた。

影山氏と女性は、仲良く話ながら喫茶店を出てくる。このまま、

どこかへしけ込むのか、それとも今日はここでお別れか。二人は話をしながら、三宮駅に向かって歩く。僕は暑さにうんざりした大学生を装いつつ、少し距離を縮めることにした。

「じゃあね」

女性が手を振って、阪神電車の階段を下っていく。しばしそれを見送った影山氏は、JRの改札に向かって歩く。今から影山氏が別の女性に会うということはないだろう。当然の事ながら、影山氏の住所や通常の通勤ルートは奥さんから仕入れ済みなので、朝霧駅あさぎりまでの切符は買ってある。

電車もバスも混んでおり、気づかれずに付いて歩くのは容易だった。バスを降り、住宅街に入ってから人通りは少なくなってしまうが、ここから再び、行動を始めることはないだろうと、距離をあける。影山氏が、マンションに入っていたのを確認し、今日の僕は任務完了。

事務所に電話連絡を行うと、先輩の吉田美由さんが電話に出た。「今日は秒殺じゃなかったようね」

僕の声のトーンから分かったのだろう、少しからかうような口調で美由みゆさんは言った。

「ちよつと女性と喫茶店でお茶してから帰りましたわ。明日が本番かな?」

「金曜だし?」

「うん」

「今日はどうするの?」

「ん?」

「事務所に顔出す?」

「うん。三宮にバイク取りに行くから、帰りに寄るよ」

「じゃあ、晩ご飯食べよつか?」

「オツケー」

携帯を切った僕は、バス停へと向かいながら、煙草に火を付け、漸く日の傾いてきた空に向かって吐き出した。

熱い吐息が耳元をくすぐる。僕は四つ年上の美由さんの髪をなで上げる。

美由先輩は、僕がホストの修行を終え、アルバイト探偵として働き始めるとき、エルダーという付きっきりのフォロー役を二ヶ月程度やってくれた人だ。本来エルダーはかなりの経験者に任せるのがこの事務所での常識なのだが、僕の場合、まだ当時二年目だった美由先輩をエルダーに所長が任命した。理由は知らないが、僕にとってはむさいおっさんに手取り足取り教えてもらうより、願ったりかなったりで、夜もパートナーになっってくれるなんて、最高に運がいいなあなんて自分の強運を誉めてやりたくもなる。

若い異性の方が、いいところを見せようと張り切って探偵術を学ぼうとするだろうと、もし所長が考えたのなら慧眼だが、ここまでの関係になってしまったのは流石に誤算だっただろうと、当初は考えていたのだが、見かけは茫洋としているながらも、目だけは笑っておらず、常に冷静な観察眼と実行力を兼ね備える所長を見ているうちに、もしかしてこれも計算のうち、なんて弱気な僕も出てきたりする。

美由先輩は、艶やかな黒髪を肩口で斜めに切り落とし、少しほお骨は高いけれども、一重の上がり気味の瞳は涼しげで鋭く、プロポーションも抜群だった。

事の始まりは、二人でカップルを装い、浮気現場のラブホテル付近で張り込みをしていた時だった。

ホテルから少し離れた場所に車を止め、ターゲットが出てくるまでの間、いろんなことを喋り、意気投合していった。ターゲットがホテルから出てくるところを車内から集光タイプの望遠カメラで撮影し、任務終了の連絡を会社に入れてから、そのホテルに二人で

入っていったのは、自然な流れだった。生まれてこの方、彼女が出来ることもなく、キスの経験すら無かった僕なのに、あっさりとそこで童貞を卒業し、二人の関係は、未だに続いているというわけだ。「翔くん、先に一回出しちゃう？」

美由さんが上目遣いで僕を見る。僕は答える代わりに、美由さんの唇を奪った。

先にシャワーを浴びた美由さんが、バスタオルだけを身にまとい、缶ビールを持ってきてくれた。僕は、トランクス一枚の姿でベッドに腰掛け、深夜のテレビショッピングを見ながら煙草を吸っていたところだった。

軽く缶を打ち合わせ、お互いビールを喉に流し込む。

「今日はどんな感じで尾行したん？」

美由さんが、僕の横に腰掛けながら聞いてくる。

「マリオネットを使った」

「へえ、少しは上達したのね。女の子？」

相変わらず、美由さんの勘は鋭い。

マリオネットとは協力者のことで、今回僕はパンダ三人衆を使うことで、尾行を容易に行うことが出来た、というわけだ。

「女子高生三人組」

「翔くん、ナンパしたの？」

少し小鼻を膨らませ、驚いたように僕を見つめる。「修行」を好評のまま終えたとはいえ、未だに僕はあまり女性に気安く声をかけるのは得意ではない。まあ、女性に限らず、基本的に他人との関係を煩雑に感じる僕は、本当は探偵に向いていないのかもしれない。

しかし、自らが他人と関係を構築していくのは苦手でも、第三者同士がどんな関係を築いていくかを観察したり、分析するのは苦にならないので、案外、天職なのかもしれない、という気もしたり

する。基本的に僕は優柔不断、一つを考えたら他方の可能性も考えずにはいられない屈折した人間なのだ。

「俺だってそれくらいはできるよ。実際、美由さんっていう自慢の彼女もゲットしてるんやで」

ちよつと歯の浮く台詞を言ってみたりする。

「翔くんは私がゲットしたの」

そう言いながら、美由さんは僕の頬に軽くキスをした。

「多分、明日が本番や」

僕は話題を元に戻す。

「金曜だしね」

「うん」

「一人で大丈夫なの？」

「今回一人でつてのは、きつと所長が僕を試してるんやと思うねん」

「多分そうよ」

「だから、明日はちゃんと仕事をやり遂げて、そうしたら始めて事務所の仲間になれるって思うんや」

「もう立派な仲間よ」

美由さんはそう言うが、一人前の探偵として所長に認めてもらえないと埋まらない溝というものの存在を僕は感じている。

いつでも、みんなは僕を助けてくれる。でも、まだ誰も僕に助言は求めない。今の事務所の最年少、しかも僕はアルバイト探偵なのだからそれは当然のことだが、頼ってばかりではなんとなく、居心地が悪いのも事実であって、僕は今回の仕事とその転機になるかもしれないと感じていた。

「ありがと」

僕は美由さんに軽く口づけし、帰宅の準備を始める。

「帰るの？」

「うん。今から午後まで寝だめしとくわ」

他の探偵社はともかく、シーク・エージェンシーに会社時間、退社時間などという概念はない。週に何日出勤しなければならぬと

いう規則もない。交替しながらとはいえ、数日間連続でターゲットに張り付くこともあるし、ガーボロジーと呼ばれるゴミ調査で、シユレッダーにかけられた書類を復元するのに徹夜するなんて当たり前のことだ。定時出勤、定時退社する探偵なんてものが存在したら、一度はお目にかかりたいものだ。

といいながら現役高校生の僕の場合、学校の授業が終わらなければ、事務には行けないのも事実ではある。探偵という仕事に興味を持つにつれて、授業を抜け出す機会も多くなったが、ちゃんと出席日数は数えながら行動している。

高三の夏休みと言えば、受験勉強というのが世の中の常識だけど、一応進学は希望しているものの、勉強に勤しむほど僕は必死に生きてはいない。

今は夏休みの真っ最中で、存分に使える時間を有意義に僕は過ごしているのだと開き直すことで、なんとなく感じる後ろめたさを宥めている。

「明日もマリオネット?」

美由さんが訊いてくる。

「さあ、考えてないや。臨機応変に対応しろって僕に教え込んだの、美由さんやん」

「そうね。頑張っつてね」

「うん」

そう言った僕は自宅に帰ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3474y/>

『途方に暮れた僕はそっとため息をついてみる』

2011年11月23日23時50分発行